

ウロウロせずには大道歩む

法律学科長 萩野芳夫

さいしよから私事にわたって恐縮だが、私は、大学の教員としては、異常に多くの大学での勤務を経験してきた。京都で大学の課程を終ったあと、東京で長い徒弟時代を過ごし、高知、滋賀、鹿児島を廻ってから、名古屋にきたというしだいである。俳優とかタレントとかいわれる種類の人びとになぞらえていえば、ドサ廻りということになる。役者にも、主役をやる人と脇役・端役があり、晴れの舞台でスポット・ライトを浴びる人と田舎の公民館や映画館兼用の劇場廻りをやる人などさまざまある。ドサ廻りの役者にも「柴又の玉三郎」とかいわれて脚光を浴びる人も、たまにはいるが。往年の美人女優で、吹雪の国境を越え、革命後日の浅いソ連に恋の逃避行をした岡田嘉子によると、主役をやる人と脇役・端役をやる人とは、さいしよの出発の仕方がちがうのだそうだ。すばらしい脇役があつてはじめて芝居は高い芸術となる。主役か脇役かは、芸術の目からみれば、もともとどちらが上とも下ともいえるものではないのだろうか。ところが、情報メディアが極度に発達した情報化社会の観客（学生）は、中央と呼ばれる舞台で脚光を浴びている人たちのことは私生活の端々までも知りたがるが、ドサ廻りの役者には興味をもたない。歌が下手でも、芸になつていなくても、ツマらぬ評論でもマス・メディアに乗りさえすれば、彼らは、観客にとつてアイドルであり、権威者である。判断基準は、マス・メディアがつくる。マス・メディアに乗っている人を大学に呼んで講演会でも開けば、会場は満員になる。クダラヌ話に聞き耳をたてる学生をみてみると、いまに大衆を牛耳る独裁者が出現しやしないかをおそれる気持になる。

ともあれ、ドサ廻り研究者のヒガミなどといわれそうだし、福地先生のご退職とどういふ関係があるのかといううな批判をうけそうなので、そういうことをいう人向けに、いささか文章を飾らねばならぬ。

福地先生は、お若いときに、はやばやと研究条件のよい、伝統のある大学に所属され、その大学の停年まで、そこで研究・教育に従事されたのだから、立派な舞台での主役の役柄を担われたといわなければならぬ。にもかかわらず、先生は、華やかな舞台にでて、観客にチャホヤされる途は好まれなかった。私のような移動性研究者が、静止型の人たちよりも得をしたと思えることのひとつは、より多くの人たちと接触できたことであるが、福地先生と数年間同僚として過ごすことができたことは、私にとっては大きな安心であった。さいきんの社会の現状につき動かされて、とかくするとフット・ライトを浴びたがる傾向が研究者のなかにも滲透しており、地道な、創造的な研究にただひと筋にうち込む人が乏しくなっている。福地先生のような研究者がいたことを知ることができて、ホッとした安心を感じたのであった。福地先生が、関西学院を退職されたあと、南山大学法学部の大学院担当教授として赴任されたことも、「ただ一筋の途」(河合栄次郎にそんな題名の書があった)を歩まれる姿勢の現われであったであろう。先生の同僚であった人びとのなかには、退職を待ちかねたように実務に転進された人たちもあつたと聞く。それもひとつの行き方であることはまちがいない。しかし、毎週、遠路を通勤する難儀もいとわず、本学に赴任することを快諾されたのは、ひたすら研究・教育の途を歩もうとされたことのあらわれである。世俗に媚びず、外の風に動かされることなく、静かに研鑽を積まれる先生の姿は、私のようにウロウロと生活してきた者からみると、不動の大山のように美しい。昨年百七歳でこの世を去られた京都の清水寺の大西良慶貫主が喝破された言葉が思いだされる。

「この世界を有漏(ウロ)という。人間はウロウロしている。

正しい考え、正しい見方をもって、ウロウロせんと大道を歩まないかん」

福地先生は、身をもって研究者の大道を示されていたことを、いまつくづくと感じている。